



学生が考える！

Vol. 8

都留市の企業×SDGsの未来



多様な価値観を認め、未来を生き抜く子供の力を育む地域の拠点



問合先 企画課 企画担当

SDGsに取り組んでいる市内企業を都留文科大学生が実際に訪問・取材し、皆さんに紹介！第8弾は子どもたちがSDGsを日常の「当たり前」として過ごしている場所、開地保育園に学生が迫ります。



1 自然の恵みを循環し、無駄にしない

開地保育園の園児たちは、土作りから畠に関わり、収穫した野菜を味わうだけでなく、残った皮はコンポストに入れ、堆肥として活用しています。保育園の裏にある森は、遊びの場でもあります。園児たちで木を伐採することもあります。伐採した木は園児自らのこぎりで薪にし、火をおこして暖をとっていました。焚き火の際に出た灰も土作りに使うそうです。

(写真左)コンポストに入れるために野菜の皮を細かく切る園児たち。▶

(写真右)暖房器具に頼りすぎないよう寒い日は園庭で焚き火をする。▶



2 地域とのつながりを大切にする



開地保育園は、園児たちが隣接するデイサービスの高齢者や地域住民と交流する機会を積極的に設けています。昨年の秋祭りでは地域住民の方々のステージ発表の時間を設け、約600人が集まったそうです。「地域の過疎化」という社会課題と「地域の人に園児たちのことを気にかけてもらいたい」という園のニーズをマッチングさせた、持続可能な社会の実現に寄与する取り組みとなりました。

◀保育園とデイサービス合同で行われているラジオ体操。園児が高齢者の体を思いやる姿も見られた。



3 SDGsの中で生きている子どもたち

「SDGsが生まれて10年。その間に生まれた子どもたちにとってSDGsは日常。多くの人や自然と関わりながら、当たり前のように『誰一人取り残さない社会』を生きて欲しい。」と語る亀澤園長。様々な課題を解決するためのSDGsの取り組みは、「自分で考えて行動してみる」という園児たちの課題にぶつかったときにしなやかに対応できる力を育んでいました。

捨てられてしまう空き箱などの廃材も園児たちにとって再利用し遊ぶもの。「もったいない」が当たり前。▶

学生からの一言

印象的だったのは、園児のリュックに防災グッズを常備し、日頃から防災意識を高め、園児自身の生き抜く力を育っていた点です。また、異世代交流の中で「高齢者から長年の知恵を教えてもらい、高齢者のために何かをしてあげたいと行動する園児たちは、『思いやり』という言葉を知る前に『思いやること』そのものを体感している」という話を亀澤園長から伺い、この子達が大人になりSDGsが当たり前の価値觀になる未来は、どんなに素敵なんだろうと思いました。

取材者：都留文科大学 平松 敬汰郎、渡辺 さやか



取材先：開地保育園

(都留市小野623)

園長 亀澤 正隆

開地保育園について
こちらから▶



Instagram

開地保育園のSDGsのポイント

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



4. 質の高い教育をみんなに

「SDGsが当たり前の社会を創る」ための教育の実践



11. 住み続けられるまちづくりを

多世代が支え合い、安心して暮らせるまちづくりの拠点



12. つくる責任、つかう責任

自然の恵みを大切にして無駄にしない、資源を循環させる取り組み

都留市ではSDGs宣言事業所を募集しています。

「都留市SDGs宣言事業について」市HP▶

取材協力：地域活性化企業人

宮川 清希 (株)ニコン日総プライム)

